

連載

京都の天文学【2】 空海とホロスコープ占星術

臼井 正（京都学園大学）

1. 光源氏のホロスコープ

今年は『源氏物語』の存在が記録の上で確認されてから、ちょうど 1000 年になることから、「源氏物語千年紀」として、京都府内をはじめとして各地でイベントが開催されています。その『源氏物語』の最初の巻「桐壺」で光源氏が生まれたときに、高麗の人相占い師が光源氏を親王でなく臣下にした方がいいと言い、「宿曜（すくよう）のかしこき道の人」も同意見だったという話があります。これは生まれた日からその人の運勢を占うという皆さんおなじみのホロスコープを、「宿曜のかしこき道の人」が光源氏のために作った、という想定でした。また、「滌標（みおつくし）」には、明石が光源氏の子を産んだときの話として、宿曜に、御子三人、帝、后かならず並びて生れ給うべし、中の劣りは、太政大臣にて、位をきはむべしと勘（かんが）へ申したりし。とあります。実際、光源氏の実子の東宮は即位して冷泉帝となり、明石の姫君は今上帝の皇后となり、宿曜のホロスコープによる占いは当たったことになっています（ただ、もう一人の子の夕霧については太政大臣に昇進する前に物語が終わってしまいます）。それでは、なぜ平安時代にホロスコープがあったのでしょうか、そして宿曜とは何でしょうか？ 実はこの話のきっかけは、あの弘法大師・空海なのです。

2. 空海と『宿曜経』

空海は宝亀五(774)年頃、讃岐国(現在の香川県)に生まれました。彼は 18 才で奈良の大学に入り、官僚となって出世するための勉強を始めますが、親の期待を裏切って 2, 3 年後には出家してしまいます。そして、31 才の時に唐へ渡り、密教の奥義を伝授されます。2 年後の大同元(806)年に帰国した時に多くの経典を持ち帰りますが、その一つ『宿曜経(すくようきょう)』には、ホロスコープ占星術の方法などが書かれていました。帰国後の空海は東寺(教王護国寺)、そして高野山を根拠として真言宗を開き、真言密教による鎮護国家を目指しました。

ホロスコープ占星術の源流は古代メソポタミアで、2 世紀にエジプトのアレクサンドリアで活躍したプトレマイオスは天動説を確立しただけでなく、占星術も集大成しました。これらの天文学や占星術は、紀元後 2～3 世紀にインドへ伝えられ、インド固有の要素と混じり合ってインド占星術が生まれます[1]。この占星術は本来、仏教とは無関係でしたが、それが中国に伝えられたときには密教の一部となっていました。その代表的な経典が『宿曜経』で、この『宿曜経』にもとづいた密教占星術の体系を宿曜道と呼ぶようになりました。

ただし、空海自身が『宿曜経』によってホロスコープを作った形跡はありません。というのは、ホロスコープを作るためには誕生時の太陽・月や惑星の位置を計算しなければなりません。『宿曜経』はインド占星術の初歩だけを記したもので、それほど詳しいものではなかったからです。空海の上に伝えられた『七曜攘災決(しちようじょうさいけつ)』や『符天曆』などに、惑星などの位置を計算するための方法が書かれていて、それらによってホロスコープを作るだけではなく、陰陽寮とは独立に日食や月食の予報をすることも可能になりました。

3. 平安時代のホロスコープ

実際に平安時代に作られたホロスコープも伝えられています[2]。図 1 は、天永三年十二月二十五日丑時(ユリウス暦で 1113 年 1 月 15 日午前 2 時ころ)に生まれた人のものです(名前は分かりません)。ここには放射状に 12 等分した同心円が描かれ、一番内側には十二支、その外側には

白羊、青牛、陰陽、巨蟹、獅子、小女、秤量、蝸虫、人馬、磨羯、宝瓶、雙魚(雙は双の旧字)

とあります(白羊宮が時計でいうと 3 時と 4 時の間で、以下、時計と反対回りに進みます)。これは

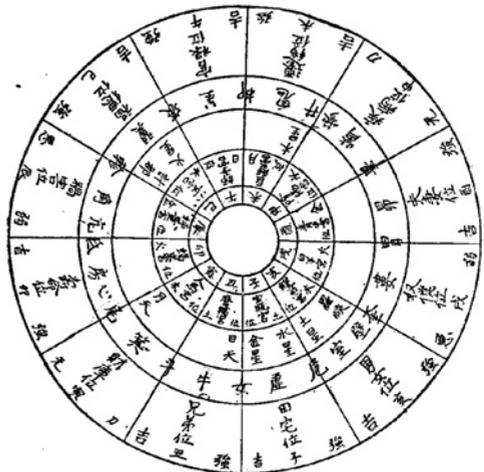


図 1 天永三(1113)年のホロスコープ。
[3]より。

黄道十二宮を表して、現在の名前

白羊(おひつじ), 金牛(おうし), 双子(ふたご), 巨蟹(かに), 獅子(しし), 処女(おとめ), 天秤(てんびん), 天蝸(さそり), 人馬(いて), 磨羯(やぎ), 宝瓶(みずがめ), 双魚(うお)

と比べても、ちょっと違いますがほぼ分かります。その外の円には、日天と月天、水星・金星などの5惑星、それから計都(けいと)と羅睺(らご)という日月食に関連する架空の天体(これらを合わせて九曜といいます)の位置が示されていて、さらに外の円には中国の二十八宿が記されています。また、一番外側の円は十二位といて、誕生時の東の地平線を基準にして黄道を12分割して、それぞれが寿命や財産などを司る所とされたもので、西洋占星術のドムス(家)に相当します。

この図の後には星占いの本文が続いています。そこでは、この人について
本命宿は尾宿:誕生時に月は二十八宿の尾宿(さそり座の尻尾)にあった
本主宮は人馬宮:誕生時に月は人馬宮(いて座)にあった
本命宮は蝸虫宮:誕生時に東の地平線に昇ろうとしている宮は蝸虫宿(さそり座)であった

と記されています。そして、尾宿生まれの人は「富貴を自在に得る」、人馬宮生まれの人は「君王の寵愛を承る。威徳有り」、「父母に孝順なり」、「寿命は七十二を過ぎる」、などと占われています。現在のホロスコープで「私はうお座です」というのは、生まれた時に太陽が双魚宮(うお座)にある、という意味ですが、当時は太陽が入っている宮は重要ではありませんでした。

4. 宿曜師たちの活躍

宿曜道を用いて占いをする人を宿曜師といい、歴史書や貴族の日記にも宿曜師が登場します[4]。鎌倉時代の延応元(1239)年に、京都の公家出身で後に五代将軍となる藤原頼嗣(よりつぐ)が生まれましたが、その時に陰陽師が「巳刻(午前9~11時ころ)誕生」と記したところ、宿曜師助法印珎誉は、実際の誕生時刻は「辰刻の終わり(午前9時前)で、時刻に違いがあるとホロスコープ(宿曜方勘文)が違ってきます。」といて、誕生時刻を訂正させました(『吾妻鏡』)。これはホロスコープの中でも、十二位(3.参照)が誕生時刻に大きく影響されるためでした。

宿曜道の占いは、こうしたホロスコープ占星術だけでなく、日食勘文、月食勘文(日月食が起きた天空上の位置による占い)や、行年勘文といった種類もありました[5]。行年勘文は年末に翌年一年間の運勢を占うもので、藤原定家の『明月

記』寛喜元(1229)年十二月二十五日条には、宿曜師良算から行年勘文を送られ、翌年の三月と九月は慎むようにアドバイスされたこととあります。実際に翌年の九月に左膝を患って歩行困難になり、九月十八日には予言が当たったことについて「而(しか)して今月を迎えて、この事有り。恐れて恐るべし。」と記しています。

このように宿曜道は陰陽道と共に盛んに行われました。しかし、その後はだんだんと衰えて、純粋な形の宿曜道は室町時代初期くらいで終わります。

5. 惑星の名前と一週間の曜日

中国での惑星の呼び名は、もともと辰星(しんせい:水星)、太白(たいはく:金星)、熒惑(けいこく、又は、けいわく:火星)、歳星(さいせい:木星)、鎮星(ちんせい:土星)で、飛鳥時代に天文の知識を中国から輸入したときに、日本にもこれらの惑星の呼び名が入ってきました。一方、『宿曜経』が中国語に翻訳されたとき、惑星名は火曜・木曜、又は火精・木精と漢訳され、『七曜攘災決』など宿曜道の他の文献では火星・木星というふうに訳されました。図1のホロスコープでも火星・木星と記されていますので、現在の惑星名も宿曜道が起源ということになります。

さらに『宿曜経』には生まれた日の曜日によって、その人の性格や運勢について占う方法も書かれていて、こうして日本に一週間の曜日も入ってきました。図2は藤原道長の日記『御堂関白記』の長保六(1004)年二月十九日から3日間の部分で、具注暦と呼ばれる暦に書き込まれています。具注暦には日付に加えてその日の吉兆が記され、余白に日記やメモが書き込めるようになっていました。ここには、日付の上に、二十八宿(心、尾、箕)の名前とともに、日、月、火とあります。二月十九日はユリウス暦では3月12日で、確かに日曜日でした[7]。この曜日は現在のもので連続していますので、千年間に渡って一日も間違わずに、曜日が当てはめられていたことになります。ただし日曜が休日というわけではなく、曜日は、現在の六曜(大安や仏滅など)に似た占いの一種に過ぎませんでした。また、図2の右下には藤原道長による書き込みで(安倍)「晴明」の字も見えます。この日、道長は84歳の安倍晴明を伴って新しく作る法華三昧堂の土地探しに宇治木幡に行っていました。

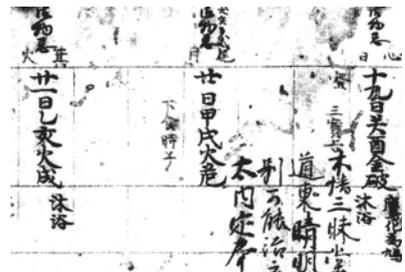


図2 『御堂関白記』。[6]より。

6. 密教と科学

現在の仏教というと伝統的で古くさい感じがして、お坊さんが天文計算をして星占いをするというのは、イメージに合いません。なぜ当時は、そのような活動をしていたのでしょうか。

当時の仏教は現在イメージするような宗教の範囲に留まりませんでした。例えば、お寺の大きな建物や五重塔を建てるということは、現在の高層ビルの建設に匹敵するような大工事です。仏像を銅で作って、その上に金メッキをすることも当時の先端技術で、今でいうとパソコンを作ることに当たるかも知れません。当時の仏教は人々の心を救うだけでなく、一大ハイテク産業でもあったのです。

仏教の中でも特に密教は、人間だけでなく草や木などの自然全体が成仏できる、というように現世と生命を肯定する傾向が強くなります。もちろん密教の第一の目標も悟りを開くことでしたが、そこに雨乞いや病気の治療、占星術による未来の予測といった、現世で安らかな生活を送るための技術が加わっていきました。空海も、病気になった嵯峨天皇のために護摩を焚き、薬を差し上げて病気を治しています。さらには早魃(かんばつ)が起きたときに空海が京都の神泉苑で雨乞いの祈祷をして、京の都に雨を降らせたという伝説も残っています。

病気になっても大した治療法は無く、天気予報も無かった時代の人々が仏教、特に密教に抱いたイメージは、現代人が最先端の科学技術に抱くイメージと似ていたはずです。ホロスコープ占星術が密教と結びついたのも、このような背景があったためでした。こうして、『宿曜経』をもたらした空海の影響が現在も、黄道十二宮や惑星の呼び方、さらに一週間の曜日に残っているのです。

参考文献

- [1] 矢野道雄, 1986, 『密教占星術』, 東京美術
- [2] 藪内清, 1990, 『中国の天文暦法』, 平凡社, pp.369-377
- [3] 塙保己一編, 1974, 『続群書類従第31輯上』, 続群書類従完成会, 巻908
- [4] 桃裕行, 1975, 「宿曜道と宿曜勘文」, 『立正史学』39号, pp.1-20
- [5] 山下克明, 1996, 『平安時代の宗教文化と陰陽道』, 岩田書院, pp.319-347
- [6] 京都文化博物館・郡山市立美術館・読売新聞大阪本社編, 2003, 『安倍晴明と陰陽道展』図録, 読売新聞大阪支社, p.12
- [7] 作花一志 <http://www.keg.ac.jp/keg/sakka/koyomi/youbi.htm>